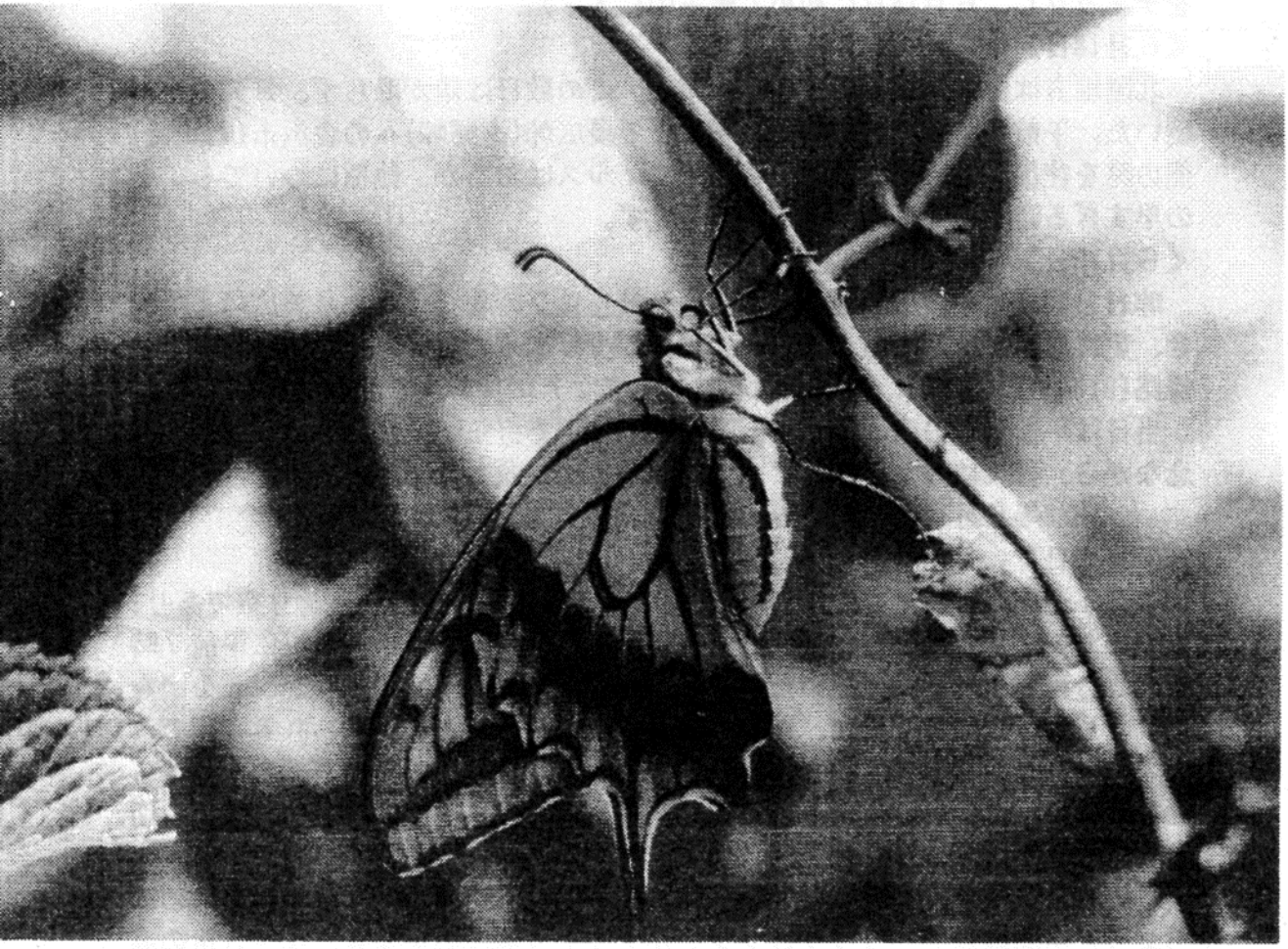
潮

NO.71

'88 AUGUST



Butterfly

Beetle

Insect

百万石蝶談会

１９８８年、医王山、アイノミドリの乱舞

指田春喜

今夏(1988年)、ゼフィルスの採集を目的として、医王山に６月下旬より数回入山した。このうち、７月７日の朝、アイノミドリシジミ(♂)の群飛に遭遇したので、その経過と模様を報告する。

本会への入会を期に、石川県をはじめ北陸地方での採集に奮起し、先輩会員にならい、早朝の医王山に通いはじめた。『翔』創刊号よりのバックナンバーをチェックし、６月18日に初めて医王山に入った。

《６月18日》

北陸地方は梅雨入りしているとは言え、この数日は雨が降らず、好天の日が続いた。午前７時現地着。午前８時半まで菱広峠(夕霧峠)への金沢市(石川県)側の路を往復する。しかしながら、ゼフィルスはおろか、他種についても、その早すぎる時間のためか、全く蝶影を見ず。

《６月19日》

昨日と同様に、菱広峠と重山(しげやま)道路の分岐点に７時着。ここより菱広峠まで歩き、更に奥医王山に登る。この間、気温が少し低めであり、蝶は全く飛ばず。帰路(9:00～10:30AM)、路上で吸水中の新鮮なテングチョウを採集する。

当日は午後からの所用のため、採集は午前中で打ち切らざるを得ず、また残念ながら、好天にもかかわらず、ゼフィルスは１頭も目撃できない。

1988年６月19日　指田春喜　　テングチョウ　９exs

《７月２日》

ここ１週間程は梅雨空で、曇り時々雨の日が続いた。この日も曇り空であり、早朝のゼフィルスの採集には少し気温が低すぎた。重山道路分岐点に午前７時着。５分程菱広峠に向い歩いたところ、新鮮なジョウザンミドリシジミ１♂をネットした。しばらく歩き、通称「嵯峨井ポイント」として知られる場所で、アイノミドリを目的の嵯峨井淳郎氏と会う。曇り空で、天候の方はあまりはっきりせず、気温は少し上がってくるも、勤務のため、午前８時20分に採集を切り上げる。

この日、再び午後２時より２時間程採集した。医王の里と重山道路分岐とのちょうど中間地点で、ウラクロシジミがチラチラ飛ぶのを発見。４～５ｍの高さを道路と平行して、早くはないが、不規則に飛ぶのは採集しにくい。午後４時頃より、厚い雲におおわれ、気温も下がってくる。それまでウラクロと紛らわしく飛んでいたルリシジミも何処かへ消えてしまい、この時点で採集を終わる。

1988年７月２日　指田春喜

ジョウザンミドリシジミ	１♂	ウラクロシジミ	７♂♂
エゾミドリシジミ	２♂♂	ルリシジミ	３♂♂

《7月3日》

気温は高く、午前中はうす陽も差したが、午後より雨となる。この日、私はアサマシジミを狙って、白山山麓に入るも目的達せず。

尚当日、大学院生(安池氏)が医王山に入り、重山道路分岐点前で、午前7時半から1時間の間に、アイノ、ジョウザン、エゾ(ともに新鮮)合わせて25♂♂を採集。しかしながら、筆者はその頃、アサマを求めて、スーパー林道を徘徊しており、その詳細については知る由もない。

1988年7月3日　安池修之

アイノミドリシジミ	1♂	エゾミドリシジミ	1♂
ジョウザンミドリシジミ	23♂♂	クロヒカゲ	1♂

《7月7日》

午前6時半頃より晴れ間が見えはじめ、午前中はまずまずの天気であった。この数日間、6時の空を見上げては、厚くどんよりとした曇り空や、小雨に濡れた屋根瓦を見て、溜息ばかりついていた。

午前7時10分嵯峨井ポイント着。ここに来るまでの道路沿いでは、ほとんどその姿を見せなかったゼフィルスであるが、ここで幾つかを見つけることができた。灌木の枝先や、ススキの葉上で金緑色の背を光らせながら、ベタッと羽を広げて止まっている個体が観察される。まだその動きは遅く、ネットで拾うようにして採集。まもなく左手前方の斜面の木々の間から朝日が漏れはじめる。奥の方から飛んでくる個体に、それまで止まっていた個体がスクランブルをかける光景があちこちで見られる。10m程の高さから2頭がもつれ合うようにして、徐々に下に降りてくる。その間、長いものは5秒から10秒ちかくもそうしており、地上スレスレまで下がってくる。口径50cmのネットで2、3採集しては胸を押し、まとめて三角紙に包んでいたが、その数はどんどん増えてきて、とてもそれでは追いつかない。

7時50分頃には、ネットに入った個体の胸を3、4つ押している間にも、目の前には30以上が緑色をチカチカさせながら飛び回っている。この頃には、何秒間も2頭でもつれ合っている余裕はなく、すぐ別の個体が邪魔をする。3頭が前後して飛翔すると、それにまたスクランブルをかける奴がいる。結局、4、5頭が流れるように飛び去ってしまう。また戻ってくるが、全く別の個体であるのか見分けられる筈もなく、奥からはどんどん湧き出してくる。もはや三角紙に包んでいる事など出来なく、胸を押した個体を車のボンネットの上にあけていく。

8時30分、まだまだこの状態が続いているし、気温も上がってきた。蝶屋なら、ここで採集を止めて帰るなんぞは全く考えられないことであるが、今日は木曜日。大学とは言え、勤務がある。同行の大学院生は9時からセミナーがあると言う。後ろ髪を引かれつつ、まさに断腸の思いで採集を中止する。急いで車のボンネットの上のものを、まとめて5頭位ずつ三角紙に包む。金緑色の表

を見せ、オチョコになってしまったものもいるが、そんなことは構わず、また採集した個体を数える余裕もない。

８時40分、ややその数を減じたとも考えられるが、まだまだ20～30頭程が飛び回っている。「あっー、あ～あ」と声を発し、後を振り返りつつ、この場を去った。

結局、この日採集した数は122頭であり、その全てがアイノミドリシジミの雄であった。ほとんどが新鮮であり、尾状突起の無いものなどはほんの極わずかであった。尚、このアイノミドリの乱舞の前に同じ場所で、フジミドリシジミ１♂（少々破損）を採った。

1988年７月７日　指田春喜

フジミドリシジミ　１♂　　アイノミドリシジミ　122♂♂

《７月９日》

曇り空であるが、気温は比較的高く、蒸し暑い。同じくアイノミドリのポイントに７時10分着。この朝もやはり１時間半ちかくここで採集したが、７月７日に比べると、はるかにその個体は少ない。また、先に得られたのは、全てがアイノミドリであったが、この日はジョウザン、エゾもかなりの数得られた。彼らはアイノの乱舞していた場所とは、その場所を50～100m程ずらしており、アイノミドリと混飛することはなかった。

午後２時半より、同地で１時間半程採集。天候は相変わらず曇り。午前中、あれほどいたアイノ、ジョウザン、エゾはほとんどその姿を見せず。時折、下からウラゴマダラシジミが吹き上げられて来る。やはり時期は少し遅く、汚損した個体も混ざる。

1988年７月９日　指田春喜

ジョウザンミドリシジミ	18♂♂	ウラクロシジミ	１♂
アイノミドリシジミ	23♂♂	ウラゴマダラシジミ	７♂♂
エゾミドリシジミ	５♂♂	テングチョウ	１♂

以上、１日に２回も通った日もあるが、合計７回、医王山に採集に出かけた。６月中旬はゼフィルスは全く姿を見せず、「今年は発生が遅いのかなあ」また「たくさん採れたのは数年前までで、もうゼフはいないのかなあ」などと独り言を言っていた。それが、７月７日の朝、すごいアイノミドリシジミの乱舞に遭遇した。この金緑色した小さな蝶が多数帯状になって飛ぶ様はまさに『七夕の夜の天の川』を思わせるものであった。

今日、この拙文を書くにあたり、これまで地元石川県をはじめ北陸の昆虫相の解明を、積極的に推し進めてきた先輩会員に敬意を表するとともに、”嵯峨井ポイント”をはじめ種々教えを戴いた嵯峨井淳郎氏、並びに発表を進められ、私信を戴いた松井正人氏に感謝いたします。また、今回採集中、常に同行された大学院生（北陸大学薬学部）の安池修之氏にお礼申し上げる。

（１９８８．７．１３．記）

奥能登のウスバシロチョウ

松 井 正 人

奥能登で、ウスバシロチョウ多数を目撃確認したので報告する。

奥能登のウスバシロチョウが、広く知られるようになったのは、1981年の天野氏[1)2)]、及び竹谷氏[3)]の報告以降であろう。以後同地(門前町猿山)において、多数の個体が観察され、更に門前町薄野[4)]といった新産地も発見されたが、それ以上の報告はなされていない。

今回確認したのは、下記の４ヵ所で、山村の人家周辺で多数目撃したが、それ以外では、男女滝の１♂しか発見できなかった。また時期が遅かったせいか、破損した個体が多く見られた。

輪島市上山、房田、上でも調査を行なったが、発見には至らなかった。

奥能登のウスバシロチョウは決して珍しいものではなく、分布も広いと考えられ、今後の調査により、各地で発生が確認されると思われる。

輪島市男女滝	1988年５月28日	１♂採集	松井正人
輪島市小	1988年５月28日	多数目撃	松井正人
輪島市上黒川	1988年５月28日	多数目撃	松井正人
門前町西丸山	1988年５月28日	多数目撃	松井正人

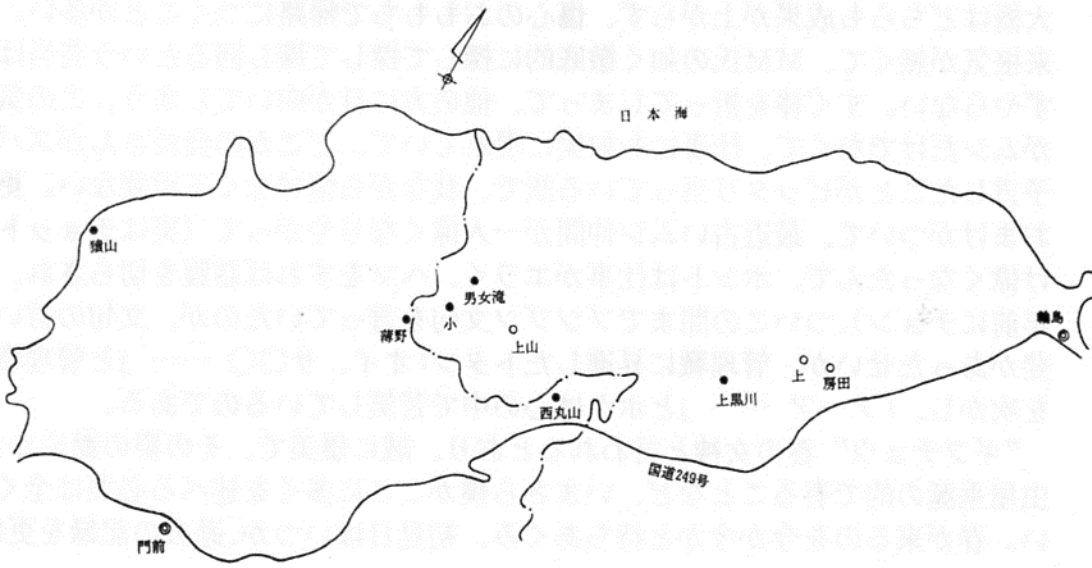
参考文献

1)天 野 勝 広(1981) とっくりばち(46)：５～６

2)天 野 勝 広(1981) 翔 (23)：１

3)竹 谷 宏 二(1981) とっくりばち(46)：10

4)嵯峨井淳郎・他(1982) 翔 (32)：１～２



ギフチョウの第4食草を確認

嵯峨井淳郎・田中秀夫・松井正人

1988年5月29日、鶴来町獅子吼高原で、ウスバサイシンよりギフチョウの卵殻、及び食痕を確認したので報告する。

本県からはギフチヨウの食草と成りうる植物が4種、すなわちヒメカンアオイ、ナタデラカンアオイ、フタバアオイ、それとウスバサイシンが知られている。ヒメ、ナタデラ、フタバは既に食草として確認され、第4食草としてのウスバサイシンの確認が待たれていた。

ウスバサイシンの分布地は局地的で、既存の発生地から遠く離れていたり、徒歩数時間と交通の便が悪かったりで、あまり調査もされず、調査されても度重なるものでは無かった。しかし今春、田中により、既発生地の中に徒歩10分と調査にはうってつけのフィールドが発見され、嵯峨井・田中・松井による2度の調査の結果、ついに食草の確認に至った。

この地はヒメとナタデラの分布の接点で、その一隅に極わずかのウスバサイシンが見られ、この中の2葉(別株)から食痕が確認され、その1枚にはフ化殻7卵(1卵塊)が、もう1枚には卵の脱落痕が付いていた。ヒメ、ナタデラからも同時に食痕、フ化殻が確認されたが、どの食草からも幼虫は発見されなかった。

ギフチョウ・ラヴ・コール

チョウキチホマレ

2頭を追うものは1頭も得ずという(本当は、2兎と書くのが正しい)。チョウキチホマレは山へ入る時、常に目標の蝶がいなければ山菜取りに、あるいはキノコ取りによく変身する。最近はそれに加えて山草採りにも化けたりする。大概はどちらも成果が上がらず、傷心のおももちで帰路につくことが多い。元来根気が無くて、MM氏の如く徹底的に探して探して探し回るという芸当はまずやらない。すぐ棒を折ってしまって、他の方に目が向いてしまう。この気質がムシだけでなくて、仕事にも如実に現れていて、どこかの会長さんがズバリ予言したことがピッタリ当っている訳で、我ながら情けなく不甲斐ない。更におまけがついて、最近古いムシ仲間が一人偉くなりやがって(実はチョットだけ偉くなったんで、ホントは仕事がエラく、ヘマをすれば詰腹を切らされ、定年前にチョン)、ついこの間までブツブツ文句を言っていたのが、文句の言い甲斐があったせいか、管理職に昇進したトタン「オイ、サ○○ …… 」と管理職風を吹かし、「アーア …… 」とボクは心の中で苦笑しているのである。

”ギフチョウ” 春の女神と言われるとおり、誠に優美で、その姿の艶やかさ、虫屋垂涎の的で有ることなど、いまさら僕がここに多くを述べる必要は全く無い。春が来るのを今か今かと待ちあぐみ、初見日はいつか、過去の記録を更新、

いやいやタイ記録だ、どこどこでは２月に記録がある、…… etc といやはや、その人気たるや会内 ”一”であろう。そして毎年キチンとパターン化していて、何はともあれまずギフチョウからと動きだすのである。これは、僕だけでなく、松井氏しかり、勝海氏しかり、中西夫人しかり、細沼氏しかり。今年はあるモクロミがあって、各地のギフチョウをズボラな僕としては、かなり精力的に採りまくった。ほとんどの採集地で、必ず１人２人の同業者に合う。西田慎也、杠　隆史氏といった有名(？)な方々にもお目通りできた。多数の個体を得るには、未開地(？)北陸へ！！　という唄い文句が偽らざる現状で、どちらかと言えば地元ムシヤより遠来者の方が開拓精神旺盛で、しっかり採集していくようである。おまけに地元の知らない新産地を、必ず１～２箇所開拓して帰って行くようである。ギフチョウ・ラヴ・コールとはこれ程に影響力は絶大なのである。

金沢産のギフチョウは、昔から一般的に他の産地のものに比較して小さい(必ずしもそうとは言えず、かなりデカイのも採れている)と言われている。なぜなのであろうか。いろいろ推測され、諸論フンプン。僕の20年以上も前のラベルの付いた小型のギフチョウが、ズラーっと並んだのを見た経験から(勿論、全て野外品)、お得意の独断と偏見で勝手に想像したした事をひとつ。

当時のギフを産する山林は全くの未開発で、人跡未踏(少々オーバーだが)雑木がおい繁る中で、食草となるヒメカンアオイの成育力が非常に遅かったのではないか？。他の産地で同じヒメカンアオイ（ボクにはヒメには見えないのだが）が大きな株状に成育しているのに対し、金沢では１葉か２葉程が単発的に生えているのをよく見かける。そこに産卵されたギフ卵は、小さなヒメカン１～２枚を食べつくした後、次の食草を求めて放浪の旅に出る(勿論終齢以前)。次のカンアオイに巡り会える確立の低さを想像して頂きたい。仮りにカンアオイに巡り合えたとしても、すぐ食べつくし、又々放浪、これの繰返し。途中カンアオイに巡り会えず、野垂れ死にするもの等、いろいろと障害があろう。何とか生き残り、蛹化に成功した彼女達の成虫姿は『小さかった』。全くの独断と偏見である。

ところで、雑木林を伐採したあと、杉等が植林(金沢では竹林も多い)され、数年を経れば手頃な状態と成って、林内に自生しているヒメカンアオイは自然的な肥料と人為的肥料により、マルマルとした大株に成長。これを食しているせいなのか、最近金沢産のギフチョウもかなり大きくなり、全国平均並になったと思いませんか。

適度の伐採がカンアオイの成育促進 ⇒ 大きな(普通の大きさ)ギフチョウ
という式が成り立つように思えてならない。

30年以上も前の昭和20～30年代に採集された金沢周辺産のギフは確かに小さいのです。皆さんも一度、自らが所有するギフチョウ標本を一度見直して見て下さい。標本箱の中から、またまたラヴ・コールが聞こえてくるようです。

オサムシが釣れた

小幡英典

1988年６月13日、同僚に誘われ、気は進まなかったのですがイワナ釣りに出かけました。と言うのも、この日釣りに行くと休日３連ちゃんのイワナ釣りになってしまうのです。相手の方は１カ月振りの釣りだから、ワクワクしているのですが、私の方は雑用もたまっているし体調もよろしくなく、出来ることならパスしたいのですが、日頃の付き合いを考えるとことわる訳にもいかずといった事情があったのです。

そんな具合ですから集中力も無く、ポイントに糸を垂れてもイライラしてくるといった有様で、竿を川岸に置いて腰をおろしていると、私の方にオサムシが走ってくるのが見えました。例のせせこましい走りかたなのですが私の手前50cm位に来ると、足は動いているのに進みが急にのろくなるのです。変に思いのぞいて見ると、オサムシはイワナ釣りの針のついた川虫(カワゲラの幼虫)を食わえ、竿と綱引きをしているのでした。

そのまま釣り上げてもしっかり食わえて離さず、足をひろげている有様です。そこをすかさず撮影していれば、オサムシの面白い写真になったのですが、２時間しか寝ていないお粗末な脳みそはそこまで働かず、イワナ釣りのエサとなるべく、エサ箱に放り込まれてしまったのでした。

ちなみにその日の釣果は１匹、バラした数は実に４匹という、私のイワナ釣歴の汚点とも言うべきひどいものでした。

SUN SUN 午後

近頃、近所でやたらと子供の声がするのでどうした事かと思っていたが、考えてみるともう夏休みのまっ最中なのである。私が夏休みに縁がなくなって、もうどの位経ったのだろうか。夏休みという存在すら忘れてしまっていた。

夏休みというとやはり思い出すのは昆虫採集である。子供は大なり小なり虫に興味を持っているが、もちろん私も”一人一研究”というと必ず標本を作る、特別虫好きの子供だった。母に手伝ってもらいながらも、どうにか展翅をし、インロー型の箱にズラっと並べた。大型の美しいアゲハ類が多かったため、９月になって学校へ持っていくと、「買ってきたんじゃない？」と言われたものだった。

男の子にまざり虫カゴをぶらさげて、原っぱや柳の下を走り回っていたし、虫と名が付けばくさい臭いのするゴミムシやシデムシでも平気で採ってきた私だが、きらびやかな蝶の翅には特に憧れたらしく、”カラスアゲハの翅のような服を着てみたい”と作文に書いた事を覚えている。やはり女の子だったのだ。

あのころは夏休みとなると、虫カゴを肩から下げた子供たちがあちこちに散らばっていたものだが、最近はめったに見かけなくなった。そういえば、今住

んでいる家の回りでは、まだ一度も見た事がない。店に並ぶカブトムシやクワガタムシも近頃は売れ行きが悪いという。以前は小学生という言葉を聞いて思い浮かぶのは、虫カゴを下げまっ黒に日焼けしている姿だった。しかし今は、ファミコンの前に釘づけになっている、こまっしゃくれた姿を想像してしまう。時代が段々子供たちを自然から遠ざけてしまうようだ。

そんな中でも我が子だけは、ムシ屋の子として恥じぬよう虫好きにしなければと、クワガタやカミキリで興味を引こうと考えた。まずは大きめの水槽を買ってこようとペットショップへ出かけた。店にはカブトムシやクワガタに並んで様々な品が売られていた。クヌギマットと称するオガクズやら、止まり木、餌用の皿木等、山へ行けば転がっていそうなものばかりに見えたが、商魂たくましい業者達はいろいろな品を考え出すものである。中で目を引いたのは"虫ゼリー"なる変な餌。ミニゼリー等の名で売られている小さなカップに入ったフルーツゼリーがある。蓋をめくってツルっと口に入れるとさわやかな口当たりで、夏場は特に子供たちが喜ぶようだ。もち論これは人間様のおやつだが、これと全く同じ器に入った虫用のものが"虫ゼリー"。色はオレンジがかった褐色で、さりげなくテーブルの上において置けば、「あっ、紅茶ゼリー！」とばかりにツルっと口に入れること間違いなし。味の程は判らないが、売られていたクワガタやカブトムシ達は喜んで食べていたようだから、おいしいのかも知れない。試食する勇気のある人がいたら、拍手喝采　！　買っていこうと思ったが、ムシバカセが絶対間違えて食べるだろうと思い、とりあえず水槽とクヌギマットを買って帰った。

早速、水槽に湿らせたクヌギマットを入れ、クワガタとカミキリを入れた。庭から適当な枝を切ってきて止まり木にし、小皿にカルピスを入れて隅に置いてやった。3歳になる息子は私のすることをしばらく珍しそうに眺めていたが、はりきっているのは親ばかり、そのうち知らん顔で電卓をおもちゃに遊び始めた。それから1週間、息子はまだ一度も水槽をのぞいたことがない。

ヒ　ロ　コ

短　報　14

アサギマダラ

1988年6月18日	金沢市医王山西尾平	1♂	細沼　宏
1988年7月24日	尾口村丸石谷	1ex	中西重雄・野中　勝

ムモンアカシジミ

1988年7月24日	白峰村大杉谷	7蛹	中西重雄・野中　勝
1988年7月31日	白峰村大杉谷	2蛹	野中　勝
1988年7月31日	白峰村百合谷	2蛹	野中　勝

会員の動き・しゃばの動き

✚5月28日嵯峨井氏、大多和峠を目指すが道路工事で土から奥へは進めず。2足のワラジを履くのが常の氏ではあったが、今回は1足しか持たず。土付近をブラついたところ、色々とにぎやかに採れたらしい。

✚6月5日中西氏、ザイルかついでラン探し。ついにランにのめってしまった。

✚6月5日松井氏、アサギマダラを求めて高爪山へ行ったらしいが、エビネがたくさんあったと言っていた。

✚6月5日指田氏、例会で得た情報を元に、某地で甘い汁を吸ったらしい。

✚6月7日井沢氏来沢。この日から嵯峨井邸では、毎晩マキタ式展翅の妙技が披露されている。

✚6月7日から5日間吉村氏、修学旅行の引率で九州へ。南方系の蝶でも見られないかと期待していたが、毎日雨ばかり。

✚6月12日松井、勝海のセセリコンビ、ホシチャバネを求めて小松付近へ。本命は2幼しか採れず、キマダラ、ホソバのおまけばかり。

✚松井氏が写真入りで「自然人」に載っている。家族3人のいかにもやらせ臭い写真で、氏は何を指差しているのだろうか。「この飼育には苦労されられた」とでも言っているのだろうか。聞くところによると、カメラマンは小幡氏で、レポーターは虫めずる姫といったコンビだったらしい。取材の最中、早速入会をすすめていたらしい。

✚6月12日嵯峨井邸は朝からにぎわっていた。ありがたいお話が聞ける井沢講とあって、細沼、吉村、松井、勝海、…氏と言った虫屋が集まっていた。

✚6月17日吉岡氏、真奈美夫人と共に岡山県草間台地へ。お目当てはもちろんウスイロヒョウモンモドキ。井倉で1泊し、2日間のチャレンジ。

✚6月18日野中氏、「これからバキを採りに行く」とかで、わざわざセント・ルイスからTELしてきた。2週間の予定でピンク・マウンテン辺りへ出かけ、その足で帰国するらしい。

✚6月19日竹谷氏、中宮へアサマの調査。毎年の事ながら、発生の確認には、何か胸を高鳴らせしめるものがあるらしい。

✚6月19日細沼氏、2日続きの医王山。ゼフは全く採れなく、カミキリをたくさんしばいてきた。

✚6月19日指田氏、ゼフを求めて医王山へ。クリの花はまだ固く、ゼフのゼの字もないと言っていた。

✚6月19日ウスイロ・ツアー。コンダクターは勝海氏。日帰りで1200kmを走破し、ウスイロヒョウモン、ヒロオビミドリ、キマルリ、ヒメヒカゲ、ウラナミジャノメをものにするといった、ハードでもあり、また色気の多い内容のものでもあった。

✚6月19日京都の吉田氏、キマルリをネット・イン。最近ごぶさたのフィールド・ワークだったが、この時ばかりは身体が勝手に動くのでした。

✚6月19日嵯峨井氏、ウラナミアカを求めて辰口町は湯屋へ。松田先生もビデオを抱えて来ていたらしいが、飛んでいたのはミズイロオナガがただ1頭。

✚6月23日田中氏、かねてより成長を見守っていたウラゴマダラが羽化したらしく、フィールドへ行くと抜殻になっていた。

✚6月26日指田氏、アサマを狙って中宮温泉へ。料金所付近の河原でかろうじて1♂を採集。

✚井沢氏、7月10日から2ケ月の予定でタイへ行くらしい。この時期、蝶はダメらしいが、本人は甲虫が目当てと言っている。

✚辰口の好ポイント、ギフ、ウラナミアカといった湯屋の産地がゴルフ場に成るらしく、次々と伐採されている。春に初夏にと我々を楽しませてくれたフィールドが、またひとつ無くなってしまう。

✚6月26日中西、井村のランランコンビ、ザイルはちょっと危険と、ハシゴを担いで白峰へ。今はちょうど花盛り、白花が有れば、それこそ有頂天と言っていた。

✚6月26日田中氏、ランを求めて奥能登通い。このところ毎週能登へと足を運んでいるが、クマガイソウやナツエビネはいっこうに見つからないらしい。「エビネとクモキリソウはたくさんあるんだけどなあ」と大きな溜息。

✚7月2日医王山のゼフは遅れぎみ。それでも嵯峨井、指田、澤田の各氏は例年に習ってゼフ詣。ウラクロが割合採れたらしい。

✚7月3日医王山。例年の如く、嵯峨井氏がゼフ竿を持ってやってきた。そのあと松田先生がビデオを抱えて上がってきた。採る人と撮る人。撮る前には採れない。採ってしまえば撮れない。

✚田中先生、今年は飼育に大ハリキリ。車にはいつも食草の入った1m程のケージを積んでいると思ったら、人も自由に出入りできる程の大型ケージをひそかに作っていた。

✚7月6日嵯峨井氏、車にネットを忍ばせて出勤。会社が引けると医王山へ直行。ウスイロオナガなんぞを採っていた。

✚7月7日指田氏、早朝の医王山は嵯峨井ポイントで、アイノミドリの群飛を目撃。それこそアイノが天の川のように流れていたらしい。

✚彦三大通りの街路樹にハルニレが使われていました。彦三大橋から、東インター大通りまでの新設部分です。5m程のものです。

✚7月10日指田氏、ヒサマツを狙って岐阜県へ。成虫をネットしなければ気がすまない氏ではあったが、採集に及ばず、2頭の目撃に止まった。

✚7月12日井沢氏、インドネシアへ。タイの筈だったが、帰りのキップが夏休みとぶつかって取れなくなったものの、とりあえず何処かへ行きたくて飛び立った。

✚ツマベニチョウがアブラナ科で飼育できます。食草のギョボクを含むフウチョウソウ科はアブラナ科に近く、野外でもナノハナに産卵することがあるそうです。成育は良いようですが、1回り小さくなるようです。

✚7月14日野中氏、帰国。ロッキーのパルをしこたましばいてくる筈だったが、なんと1頭しか採れなかったらしい。かわりに、エレビア、オエネイス等をどっさり仕込んできた。現在、横浜で2年半ぶりの親子の対面中。

✚7月17日嵯峨井氏、前日からの雨空をいいことに、一挙にためこんでいた軟化展翅を始めた。たまにはこんな日でもないと、ムシヤは安心して一息出来ない。

例会の記録

6月4日(土)お寺さんで虫供養の後、9時より城南管工2Fにて開催。今回は帰国したばかりの山岸氏に、インドネシアの現状と採集活動について語ってもらいました。現地語、タクシー、バス、コゼニ、マラリア、ヤマビル、ホテル、フロ、ジャパンロード等々、これから渡航を考えている人には欠かせない話でした。みせびらかし標本も、三角紙に入ったままのインドネシアの蝶でした。

その他の話題は、多摩の昆虫園は蝶がいっぱい(竹谷)、立山川のアサマはハッパでふっとんだ(勝海)、ウスバサイシンからギフの卵殻が見つかった(松井)、森本でクロコムラが採れた(田中)、戦災を免れた都市にはキマルリが?(勝海)、冷凍庫には5年もののキリシマがある(井村)、明日は何処で甘い汁が吸えるでしょう(指田)、明日の採集行に交ぜて下さい(澤田)、明日は仕事、僕には日曜が無い(野村)、明日は個人プレーで行きましょう(中西)。

出席者は山岸、竹谷、勝海、井村、澤田、野村、中西(2人)、松井(2人)の12人。

目　次

指田春喜：1988年、医王山、アイノミドリの乱舞 ……1
松井正人：奥能登のウスバシロチョウ ……4
嵯峨井淳郎・他：ギフチョウの第4食草を確認 ……5
チョウキチホマレ：ギフチョウ・ラヴ・コール ……5
小幡英典：オサムシが釣れた ……7
ヒロコ：SUN SUN 午後 ……7
編集部：会員の動き・しゃばの動き ……9
編集部：例会の記録 ……11

とぶ NO.71

1988年8月5日発行

〒920-01 金沢市大場町東871-15 松井方
百万石蝶談会
☎ 0762-58-2727
振替 金沢5-562

印刷 小西紙店印刷所